

学科	ライフスタイル学科	所感		
氏名	平岩 暁子	担当科目の授業改善を行いながら、学科の事業をひとつずつ丁寧に行い運営に努めた。		
家政学部の教育目標は、本学の教育目標と教育方針の下、「真心・努力・奉仕・感謝」の四大精神の実践を通して社会的に自立して生きていく上で必要な①スキル・リテラシー・教養等に関する一般的知識・技能と②家政に関する専門的知識・技能と③建学の精神・社会人基礎力・pisa 型学力を統合的に身に付け、社会に出てからは、これらの知識・技能をベースに生涯学習社会の中で自己の潜在能力をさらに開発しながら、職場と地域の課題解決に貢献できる人材を育成することである。 イ ライフスタイル学科の教育目標は、家政学部の教育目標の下、これからの社会の新しいライフスタイルのデザインを提案することによって、人々の日常生活を衣・食・住の面から支援することのできる人材を育成することである。 ロ 管理栄養学科の教育目標は、家政学部の教育目標の下、管理栄養士の資格を生かして、チーム医療、健康増進・疾病予防、食育・栄養指導又は健康をテーマにした食品の研究・開発等で活躍することによって、人々の日常生活を健康の面から支援することのできる人材を育成することである。 ハ こどもの生活学科の教育目標は、家政学部の教育目標の下、保育士・幼稚園教諭・小学校教諭の資格を生かして、こどもたちの学力および社会性・社会力の基礎・基本を育てることによって、人々の日常生活を子育ての面から支援することができる人材を育成することである。				
1 教育の責任				
家政学部家政学専攻・ライフスタイル学科の教員として、2025 年 3 月の時点で 7 年間教鞭をとってきた。これからの時代のライフスタイルを、衣・食・住の面から提案・支援できる豊かで自律した生活者、地域活性のエキスパートとなりうる人材の育成し、また中学校・高等学校の家庭科教員養成を行っている。2024 年度に担当した科目は下表の科目を含め 13 科目である（シラバス添付資料 1）。被服に関する講義および実習を主に担当している。 他に、教員採用二次試験対策実技指導、オープンキャンパス・スプリングカレッジ等のミニ授業、連携高への出張授業、産学連携活動も積極的に行っている。 その他校務として、2024 年度よりライフスタイル学科長を務めている。合同運営委員、FD 委員、カリキュラム委員、学生募集委員、学びの泉開発委員、3つのポリシー策定委員等を兼務している。				
科目名	学科・専攻	開講期	受講者数	備考
ファッション造形実習Ⅰ	ライフスタイル	1 年後期(2024)	37	必修・専門・教職
ファッション造形実習Ⅱ	ライフスタイル	3 年前期(2024)	20	選択・専門
衣生活論	ライフスタイル	1 年前期(2024)	40	必修・専門・教職
服飾文化論	ライフスタイル	2 年前期(2024)	42	必修・専門
卒業研究	ライフスタイル	4 年通年(2024)	5	必修・専門
ライフスタイル学演習Ⅱ	ライフスタイル	1 年後期 2024)	38	必修・専門・オムニバス
ライフスタイル学基礎講座	ライフスタイル	1 年前期(2024)	38	必修・専門・オムニバス
スタジオ入門	ライフスタイル	2 年後期(2024)	38	必修・専門・オムニバス
スタジオ A（空間・情報デザイン）	ライフスタイル	3 年通年(2024)	5	選択必修・専門・オムニバス
教育実習指導	ライフスタイル	4 年前期(2024)	15	教職必修・自由・オムニバス
国内研修旅行	ライフスタイル	1 年集中 2024)	39	必修・専門・オムニバス
2 教育の理念と目的				
被服は人の体に非常に近い存在で、人間が生きていくために不可欠なものである。被服を単にモノとして捉え学ばせるのではなく、環境と人間と被服の関係性、自らの生活と被服との関連付けを常に意識できるような視点に価値を置き、教育を行っている。例えば、高齢者や障がい者など身体機能が低下している人々の被服を考えることを				

通し、人の尊厳を理解し、着る人の気持ちになって衣生活を提案・支援できる豊かな人物を育てることを理念としている。また安価な既製服が増加する中、それらがどこでどのように製造されているのか、水やエネルギーを多用するため環境に負荷の高い産業であることを理解し、服を入手するところから、使用、その後手放すところまでの一連を、生活者として責任を持って考え行動できるよう教育していく。さらに日常生活で最低限必要となる基本的な裁縫技術を確実に習得させることを重視している。生活者としての生きるために必要な技術の修得、創造する文化的な喜びを感じられるようにし、豊かな生活へつなげていくことを教育の目的としている。

3 教育方法

「服飾文化論」「衣生活論」等の講義形式の授業では、積極的にグループワークを取り入れ、学生の意見交換の場や、共に作業できる時間を設定している。知識だけでなく、体感することで理解がより深まるよう努めている。授業内では PCR シートを使用し予習・復習の促しと、本時での授業内容のまとめが書き込めるノート形式としている。復習では学生自身の普段の衣生活と関連する内容で、そこから問題点や気付きが得られるような課題を課している。これらは毎時回収し、次の週に返却してフィードバックを行っている。(添付資料 2.3)。

「ファッション造形実習」では、可能な限りオリジナリティーあるデザインを許容し、創造力と製作の楽しみを高められるようにしている(添付資料 4)。1 年次のファッション造形実習Ⅰでは、文化式原型を用いた基本的なシャツのパターンの引き方を理解した上で、ゆめみや丈を好みに合わせ展開してよいとしている。さらにシャツのハギレを用いた小物作りをさせ、「モノを無駄にしない」という本学の創立者である寺部だい先生の教えを継承し、その大切さも学ばせている。3 年次のファッション造形実習Ⅱでは、裏地付きのジャケットを自由なデザインで製作させている。それぞれデザインが異なるため、各々丁寧に対応している。シーチングでの仮縫い、試着補正も行い、体の特徴に合わせた着心地の良さも追及している。パターン制作と修正時、裁断時のチェックには特に細心の注意を払うよう努めている。進度に遅れる学生が出ないよう主体性、計画力、実行力を常に意識させながら作業を進めさせ、授業時間外での対応も積極的に行っている。

体験型授業「スタジオ A」では、学生自身が課題を発見し計画的に企画を遂行、解決に向かえるよう、教員と学生というより共同運営メンバーといった関係を意識しながら助言・サポートにつとめている。学生の主体性を大切にし、誘導しすぎない指導を心掛けている。

4 授業改善の活動

ICT の活用により特に実習時の授業改善ができています。写真を含めた段階的な作業工程の説明をスライドで作成し、google classroom に掲載することで、全体説明後、各自スライドを自分の進捗に合わせて繰り返し確認しながら作業を進めることができるようになった。また自宅や授業時間外での作業時にも活用されている。毎年学生の理解度を確認しながら内容を検討し修正、改善している。さらに動画を含められればより理解しやすいものになると考えている。特に、手縫いのさまざまな種類と縫い方を動画で示したい。

毎年の FD 研修会への参加し研鑽を積んでいる。基礎的汎用的読解力を授業内でも養えるよう、授業改善を行っていく。2019、2021 年度には、FD 研修会の授業観察として授業公開を行った。様々なご意見、評価をいただいたことも改善に活かしている。2024 年度は「生成 AI の活用可能性～業務改善に向けた事例の共有～」をテーマに講習を受け、AI の可能性、使用上の注意点等を学んだ。さらに自身で学び可能性を探りながら、授業等に取り入れ改善につなげていきたい。

5 学生の授業評価

2024 年度の評価は添付資料の通りである(添付資料 4)。全体的に「予復習の時間」の少なさが課題である。予習および復習にしっかりと取り組める働きかけが必須である。評価が高かったのは、「教員は質問や相談ができるように配慮していた」、「教員は学生の反応を確かめながら授業をしていた」であり、上記の教育方法が具体的に数値として現れた結果と考える。全体的に概ね良い評価であったと考えるが、「どちらともいえない」と回答するものの割合が少しでも減るよう、ひとつひとつに注意を払い分かりやすい授業を行うことで、これらの評価が高まっていくよう努めたい。

6 学生の学修成果

1 年生後期の「ファッション造形実習Ⅰ」では、創立者 寺部だい先生教育方針を引き継ぐ目的で、「布を無駄なく使い切る」を軸にかかげ実習をすすめている。シャツ製作の布の裁断時から、無駄の少ない型紙の配置方法を学び、余ったハギレでポーチや小さなバッグ、シュシュなどの小物を作製していった。シャツ製作で修得した裁縫の

基礎および専門知識と技能を活用し、学生それぞれが多くのもを生み出すことができた。小さなハギレからも新たな価値を生み出せることを経験し、布に対し、物に対して大切に作る心が生まれた。またエシカル消費や SDGs を考えるきっかけにもなり、普段の生活に取り入れ活用していこうという新たな意識にもつながったと考える。

スタジオ A では、これらが反映され、2019 年には「Re ぬう〜の。」がハギレには無限の可能性があるとし、布小物製作販売や、ハギレを使ったワークショップを行いながら、創立者の教育方針、モノを無駄にしない大切さを伝える活動を行った。その活動報告は学びの泉グランプリ大会にて最優秀賞を獲得した。

2022 年には「ひまわり結婚式」が福島の震災復興のシンボルであるひまわりを育て、その花びらから染色、ドレスを製作し現地で開催される「ひまわり結婚式」へ寄贈した。さらにドレスや実習室に残るハギレから布小物を作り販売し、売り上げを寄付するなどの活動を行い、その活動報告は学びの泉フランプリ大会にて大学短大の総合優勝となる創立 110 周年特別賞を獲得した。

2023 年度は「リ・トレゾール」が使われなくなった和服を再び宝物に、をテーマに和服をリメイクしたファッションショー、そこから出たハギレを活用した小物作りと販売、ワークショップを企画・実施した。ショーでは視覚的に魅せ、出展では多くの人たちと交流し、これら通して和服の新たな価値とファッションの環境問題を広く発信することができた。この活動は学びの泉グランプリ大会にて最優秀賞を獲得した。

2024 年度は「ひごろも。」が「着物を何気ない日常へ」をテーマに、たんすの中に眠っている、特別な日でもなかなか着ない着物の新しい着こなし方を提案した。着物のリメイクはファッションショーにて、ハギレを使った小物制作販売、ワークショップなど、様々な取り組みを通して、着物の新たな魅力を発見し、多くの人に着物文化の楽しさを伝えた。名古屋市主催消費生活フェア、愛知県主催エシカルあいち等、産学連携し学外でのイベントにも数多く出展した。この活動は学びの泉グランプリ大会にて奨励賞を獲得した。

一宮地場産業ファッションデザインセンター主催の「翔工房」へ 2021、2022、2023 年応募し、連続して採択、参加している。毛織物の匠と学生のアイデアを協働して、布地から自作し、自身でデザインした衣裳作品に仕上げるため、実習で得た知識技術を大いに活用して作品作りに取り組んだ。(添付資料 5)。

これらの取り組みは 1 年次からの学修の積み重ねの成果であり、教育の軸が引き継がれ、より広く繋がった活動であると感じている。

7 授業科目に関連した教材開発

実習科目では作成したテキストを使用している。また、図や写真を含めた製作段階順のスライドを作成、毎時 classroom に掲載し、授業内、および予復習時間にも学生が繰り返しそれぞれの進度に合わせて確認できるようにしている。遡って見ることもできるので基礎知識・技能の確認をしながら、専門知識・技能の修得につなげている。さらに実物見本を使用するなど、視覚的に分かりやすく、繰り返しの説明がしやすい教材を複数準備している (添付資料 6)。

8 指導力向上のための取り組み

日本家政学会、日本衣服学会、繊維製品消費科学会、家庭科教育学会等の所属学会では、研究発表、研究会での講師を行っている (添付資料 7)。また学会行事に積極的に参加し学生へのフィードバックや新しいテーマ探求に努めている。オンラインでの講演会、セミナー開催にも積極的な参加をしていきたい。また繊維製品品質管理士 (TES) としてアパレル業界の現状をいち早く知ることや、業界関係者とのつながり作りに務めている (添付資料 8)。

9 今後の目標

短期的な目標としては、学生の将来の進路を念頭に被服の知識、技術獲得を確実にし、それらが自らの生活とどのように結び付きどのように社会で活用できるのか、多くの気づきを生み出せる授業を改善しながら進めていくことである。長期的な目標としては、高齢者や障がい者のファッションショーなどに学生とともに積極的に参加し、衣装製作だけではなく着用者と交流する機会を得ることで、服が人に与える力を感じ取ることでできる機会づくりをしていきたい。また受講生やゼミ生との交流を続け、本学での学びや体験を社会でどのように活かし、またそれ

らを現役の学泉大の学生たちにどのようにフィードバックできるか、持続的な観察を続け相互に利益のある関係を作るようにしていきたい。

10 添付資料

添付資料1：シラバス、添付資料2、3：衣生活論・服飾文化論 PCR シート、添付資料4：2024 年度授業評価アンケート結果およびリフレクションペーパー、添付資料5：（公財）一宮地場産業ファッションデザインセンター主催「翔工房」2021～2023 冊子、添付資料6：ファッション造形実習テキスト・教材、添付資料7：研究発表要旨、投稿論文、添付資料8：学会、TES 会参加一覧